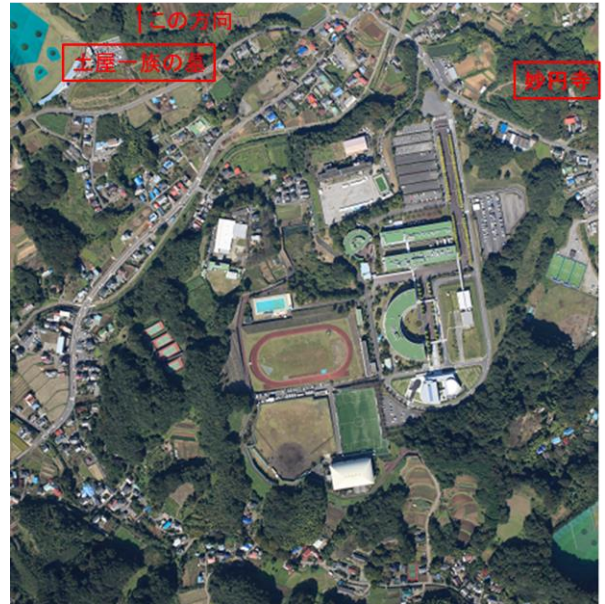


＜土屋の歴史＞前頁の地図に記した惣領分、庶子分という地名は鎌倉時代の「惣領制」の名残です。全国でも数少ないこのような地名に加え、土屋は8 km²弱(東西に3.6 km, 南北に3.2 km)の面積の中に20以上の神社と寺院があり、如何に古くからの歴史ある地かが分かります。ところで地名「土屋」の起源は土屋窪と呼ばれる6世紀頃の地下式坑(古墳?)にあるとのこと。ただ、土屋の名は土屋三郎宗遠に負うところが大きそうですね。宗遠は源頼朝の平氏討伐に加わり、そののち鎌倉幕府の地頭職として仕えた武将で、その一族ゆかりの「土屋の館跡」と「土屋一族の墓」がSHCから20分ほど歩いたところにあります。また前頁で触れた妙円寺は平塚に向かってバス道路を数分ほど歩いた所にあり「土屋の弁天さん」が祀られています。



(惣領制) 武士の所領を男子(惣領、嫡男)が大部分を相続し、残りの所領を庶子と女子が相続する制度。幕府は惣領制を通じて諸国の武士団を統制しました。土屋の地名にある「寺分」は宗遠が幾つかの寺のために与えた所領とのこと。

(土屋に因んだ書き物) ①「土屋郷土史」(1978年初版、1999年改訂版): ボリューム400ページ以上の力作です。門外漢ながら貴重な資料だと思います。読んでいて編纂された「ささりんどうクラブ(ささりんどうは土屋小学校の校章)」の方々の熱意と郷土に対する思いが伝わってきます。SHCが里山プロジェクトなどで随分お世話になった方もメンバーの一人です。②「土屋郷土史副読本、ぶらり土屋の里めぐり」(同上、2001年)、③相州土屋の里うた一唄と甚句と民謡とー(関野勝久編、2006年)、④「レンズが見たひらつか2 1976-2016」(平塚市博物館)も読んで、見て、楽しい本です。(全て平塚市の図書館にあります。)

＜里山＞上に紹介した「土屋郷土史」には、「昭和30年代まで周辺の丘陵地の雑木は燃料(薪)などとするため年中を通じて定期的に落ち葉



＜土屋一族の墓＞



＜妙円寺：土屋の弁天さん＞

を集め、枝を払い、木を伐る(12年周期)という地域の生活に密着したものであった。しかし農業から会社勤めへの変化、薪から石油への生活の変化などにより里山は荒れていった。」という趣旨のことが記されています。生き物たちの棲み暮らす”自然”の中に人々の日々の営みがあってこそその里山ですね。”わざわざ”手を掛けることなく、”当たり前”の暮らしの中で成り立つ「恒常性、ホメオスタシス(homeostasis)」の世界です。約4年にわたりSHCの四季を眺めてきましたが、ビオトープをはじめキャンパスの自然についても同じです。自然のリズムに合わせ、ヒトが”当たり前”に少しだけ手を貸すということでしょう。「年年歳歳 花相似たり」とこの先ずっとと言えることを願っています。(文と写真：松本正勝)